

## 3 3 肝腫瘍のColor Doppler Ultra Sound

(放射線科)

伊藤 直記、佐口 徹、垣内 秀雄、  
長瀬 真紀子、石井 巖、松田 裕道、  
石田 二郎、鈴木 孝成、小竹 文雄、  
阿部 公彦、網野 三郎。

カラードップラーエコーを用いて検討した肝腫瘍の鑑別診断について報告する。対象は平成3年8月から当科でカラードップラーエコーを施行した肝細胞癌20例35結節、転移性肝癌15例、肝血管腫10例18結節、肝門部胆管癌3例、肝芽腫2例、肝血管筋肉腫1例、肝線維腫1例、の計52症例である。肝細胞癌で特徴的な所見は動脈性の拍動流が腫瘍内部に流入する所見で、これは35結節中19結節の54%で見られ、3センチ以上の直径のものでは全例に認められた。肝芽腫では2例とも肝細胞癌と同様の所見が得られた。肝血管腫は18結節中4結節で内部に定常流が見られたが拍動流が検出されたものはなく、残りの14結節では明らかな血流を指摘できなかった。転移性肝癌では15例中9例では腫瘍辺縁部に拍動流が検出され、5例は血流を指摘できず、1例で腫瘍内部に拍動流が見られたが、拍動流が腫瘍内部に流入するようなパターンが見られたものはなかった。肝血管筋脂肪腫は肝細胞癌に似、肝線維腫では内部に定常流が検出された。以上のように腫瘍の種類で比較的特徴的なパターンが見られたが細小な腫瘍の鑑別は困難と思われる。しかし、カラードップラーではシャント流や腫瘍の栄養血管が同定でき、肝治療の一助を担うものと思われた。